

総合市民センター

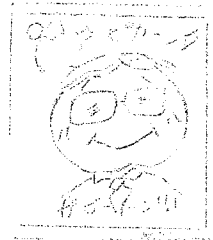
☎(24)9511 ☎(23)7444
 ㊦祝日、年末年始

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

「日本の古典文学 恋」

＋ちょっとウラ話（全4回）

6月7日㊦、8月2日㊦、11月22日㊦、
 令和7年1月31日㊦／内容＝恋愛から
 見える人間模様／講師＝伊藤 雅敏先生
 生／対象＝市内在住者／定員＝30人
 （申込順）／申込＝4月17日㊦9時か
 ら電話にて（土日は17時まで）



荏原市総合市民センターにて

10時～11時30分

令和7年1月31日（金）

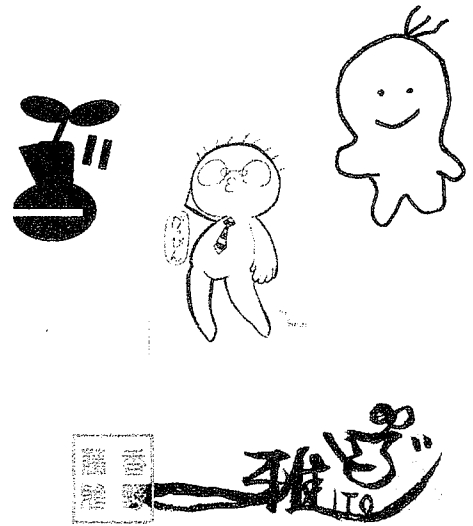
日本の古典文学 恋

＋ちょっとウラ話

No. 4



ガビン先生と
 楽しく学ぼう！！



「そなたも 犬伝士じゃ」

②

第一問：南総軍見八犬傳とは誰い書きたるや？

第二問：登場したる八の若者たちとは誰や？

。 。 。 。 。

第三問：伏姫と結婚した者の名は？

第四問：八人の一人信乃が持てる刀の名は？

第五問：女に変装するの得意なものは誰ぞや？

「松平」八大傳博せて

第一問

龍澤興邦

徳良の談話
劇作「十訓抄」

ペンネーム

筆名劇作「山東宗伝から筆名をもらう」

曲亭 馬琴

平野

1767 (明和4年)

江戸江川 松平信成旗本の用人(徳義録)
父龍澤迪兵衛興義

兄兄 兄兄 本人10歳で家督を継ぐ
(金男)

丹明 養子へ

1780 (安永9) 14才

松平家へ出る

1787 (天明7) 21才

俳文集「十医学」十儒学

1790 (寛政2) 24才

29才
山東京伝に弟子入り願うX山出へは許

1791 (寛政3) 25才

黄表紙を刊行 劇作者としてスタート
給て文事外をロマンチックに
通俗小説
「おれはたてにぶきけん」
「風雲三郎」二分狂言

1792 (寛政4) 26才

版元葛屋重三郎へ手代として雇われ

1793 (寛政5) 27才

会田家へ婿入り
未七人百
山東京伝にすめ
千箇元段北(飯田中越)
葛屋重三郎
13才

1796 (寛政8) 30才

讀本出世作「高尾船字文」
1797

登場ハ大士

徳目儒教

名

人物評

④

第二回

仁 思ひやり

大江親兵衛仁

伏姫の神霊と育ちた

やさしい

義 正しいこと

大川莊助義任

正義感あふれる忠義者

正義

礼 決まりに

大村大角礼儀

まじりを物知り

いたがう

智 かしこ

大坂毛野胤智

美しス変装の老人

けの ちねとも

忠 直心

大山道節忠子

火とんの術を使う

まことに尽す

信 誠実

大飼現八信道

十手を操る捕り物の名人

うそをつかない

→ 芳流閣

孝

父母を

大塚信乃成孝

宝刀村雨丸で三戦

大切にする

退んだ疑い

情 すなお

大田小次郎情順

大きな体で力強い

やさしい

年長者に候う

南總里見八大傳

絵も入るが文章が忠
新一巻

5

六

水戸番頭 是永丸辰橋

勸善懲惡
因果報

悲劇の最期を遂げた重良氏
安房の人

歴史は繰り返される

安房の人

義良の地方の人たち

話
里見義実は結城の戦に敗れる

新時代

安居國白浜に落ちてゐる

境域に居を構ふるニある年領域が凶作

飯山城

形勢不利

安西縣志

必攻め取らん

↓卑見義実

道に
歸る



八房に
姪を嫁として

冗談？ふれてやう

里見義実は
姫を助けよう

一午後

伏姫自ら約束をゆる
宮山の洞窟へ

嗚、八房の子を懷任

許婚
金枕大輔

鐵記

八房を轆平ち細くす

是、自害に身の潔白を証明

仙人になり
ハ大士を
捜す旅

の事が飛破
↑↑↑
又 白煙 炎弾

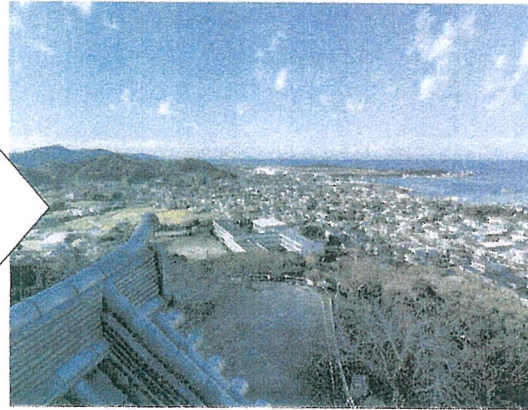
里見家の危機に集結

あゆま、はうし
し、大法師

里見家勝利 孫姬結婚



館山城から見た
街並みと海の絶景



東京都江東区深川
現在の平野1-7付近

清澄庭園の南東部
蕎麦屋の近く

江東区登録史跡
曲亭馬琴誕生の地

曲亭馬琴誕生の地

「深川が生んだ江戸後期を代表する戯作者」

平野一七・八付近

曲亭馬琴は明和四年（一七六七）六月九日、旗本松平信成の用人を務める下級武士の五男として、この地にあった松平家の邸内で生まれました。本名は「滝沢興邦」、筆名は「曲亭馬琴」・「著作堂主人」などと号しました。

安永四年（一七七五）、八歳で父と死別し、一家を支えるため松平家の嫡孫である八十五郎の家臣となりましたが、同九年に一三歳で松平家を出ました。その後、文筆で身を立てようとして、寛政二年（一七九〇）、二三歳の時、戯作者で浮世絵師の山東京伝（一七六一―一八一六）に入門しました。翌年に京伝門人大栄山人の名で初めて黄表紙（表紙が黄色で絵を主とする小説）で作品を発表しました。以後、儒教思想に基づいた教訓、因果応報による勧善懲惡を内容とした読本を次々に著しました。

また馬琴自身は、天保五年（一八三四）頃より眼を患いましたが、口述・代筆で活動を続け、嘉永元年（一八四八）一月六日に八十一歳で亡くなりました。

馬琴が著した作品は極めて多く、読本から黄表紙・随筆にいたるまで約四七〇にもものぼります。主な作品としては、『権説弓張月』（全二九冊）、文化

曲亭馬琴肖像



（制作：後醍醐天皇）東京大学総合図書館蔵

一年（一八一四）から天保一三年（一八四二）二月まで二八年かけて完結した『南総里見八犬伝』（全一〇六冊）などがあります。

令和四年三月

江東区教育委員会

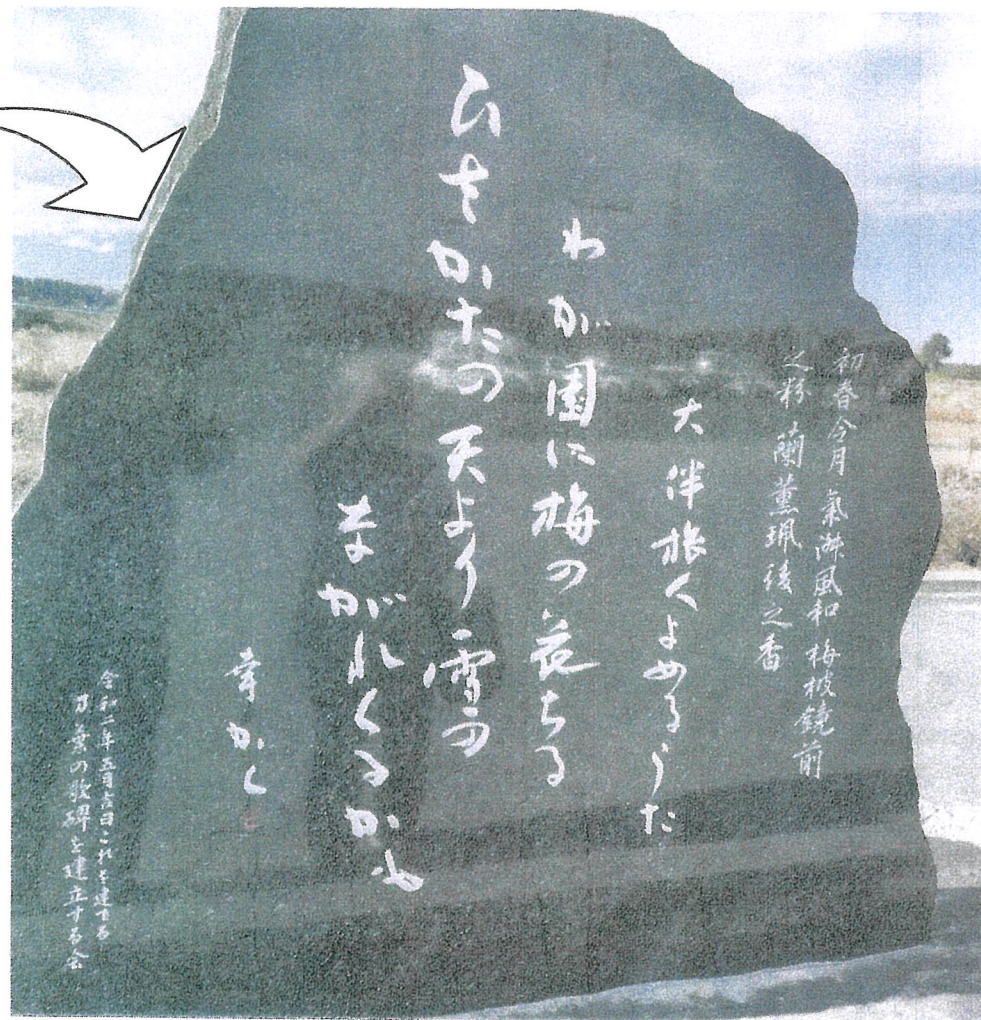
The Birthplace of Kyokutei Bakin



奈良時代 「うまぐた」 = 宇麻具多



現代 「まくた」



萬葉集 卷五

初春令月

氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

初春の令月にして

氣淑く風和らぎ

梅は鏡前の粉を披ぎ

蘭は珮後の香を薫らす

令和元年十一月二十九日（金）茂原市総合市民センター

茂原市社会福祉協議会事業

新元号「令和」記念 初めての万葉集講座

その 1



◎ 新元号『令和』の意味とは？

☆ 当時の安倍首相の談話より

人々が美しく

心を寄せ合う中で

文化が生まれ育つ

春の訪れを告げ、
見事に咲き誇る梅の花のように
一人ひとりが
明日への希望とともに、
それぞれの花を
大きく咲かせることができる。
そうした日本でありたい
と願いを込め、決定した。

正月の祝宴の華やかさ

福岡県大宰府の長官（大伴旅人）宅で梅花の宴
外交の入口の役目＋海外との文化交流の窓口
梅＝中国から渡来した流行の最先端の花

漢詩の文化
花と言えば「梅」

貴族の教養＋政治とのつながり

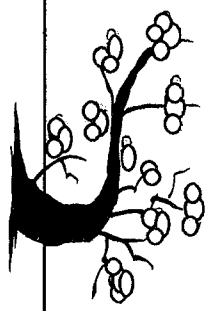
宴会ではあるがドンチャン騒ぎは無い

藤原氏の陰謀により、左遷 「長屋王の変」

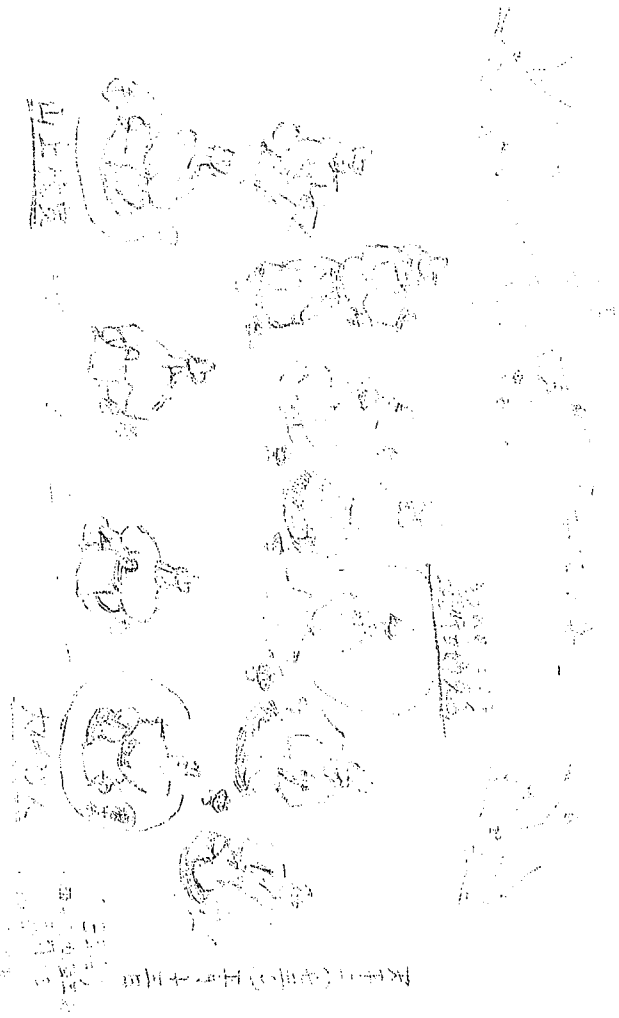
『あのころは たのしかったなあ…』

天平2年（730年）正月13日

我が園に 梅の花散る
ひさかたの 天あめより雪の
流れ来るかも
大伴旅人



『なかなか 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染み込む』
なまじつか人として生きていないで いっそ酒壺になって
一生 酒に漬かっていたいものだ
大伴旅人



⑥

梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅申宴会也

于時初春令月氣淑風和

梅披鏡前之粉蘭薰珮後之香

加以曙嶺移雲松掛羅而傾蓋

夕岫結霧鳥封穀而迷林

庭舞新蝶空暝故鴈

於是蓋天坐地促膝飛觴

忘言一堂之裏開衿煙霞之外

淡然自放快然自足

若非翰苑何以據情

請紀落梅之篇古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

(序文) 中国の詩序をまねる「蘭亭集序」王羲之
おうぎし

梅花の歌、三十二首と序

天平二年正月十三日、

大伴旅人

太宰の帥旅人卿の邸宅に集まって宴会を開く。

折しも初春の正月の佳い月で気は良く風はおだやかである。

梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は匂い袋のように香っている。

夜明けの峰には雲がさしかかり、松はその雲の羅をまとって蓋をさしかけた

夕方の山の頂には霧がかかって、鳥はその霧の穀に封じ込められて林の中に

庭には今年生まれた蝶が舞っており空には去年の雁が帰って行く。

そこで天を屋根に地を席にし互いに膝を近づけ酒杯をまわす。

一室の内では言う言葉も忘れるほど楽しく和やかであり、外の大気に向かつて

さつぱりとして各自気楽に振る舞い愉快になって各自満ち足りた思っている。

もし文筆によらないでは、どうしてこの心の中を述べ尽くすことができようか。

諸君よ、落梅の詩歌を所望したいが昔も今も風流を愛することには変わり

ここに庭の梅を題として、まずは短歌を作りましたまえ。

ないのだ。

『萬葉集』

「梅花歌 卅二首 并序」

天 平 二 年 正 月 十 三 日、
萃 于 帥 老 之 宅、申 宴 会 也。
于 時、初 春 令 月、氣 淑 風 和。
梅 披 鏡 前 之 粉 蘭 薰 珮 後 之 香。
加 以、曙 嶺 移 雲、松 掛 羅 而 傾 盖、
夕 岫 結 霧、鳥 封 穀 而 迷 林。
庭 舞 新 蝶、空 歸 故 嚢。
於 是、盖 天 坐 地、促 膝 飛 觴。
忘 言 一 堂 之 裏、開 衿 煙 霞 之 外。
淡 然 自 放、快 然 自 足。
若 非 翰 苑、何 以 壺 情。
請 紀 落 梅 之 篇、古 今 夫 何 異 矣。

宜 賦 園 梅、聊 或 短 詠。

梅花の歌、三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に

帥老の宅に萃りて、宴会を申べたり。

時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて、盖を傾け、

夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。

庭に新蝶舞ひ、空には故鴈帰る。

ここに天を蓋にし地を坐にし膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に聞く。

淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を憶べむ。

請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異

園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。